

## 双蝶々曲輪日記 引窓の段

渥美清太郎

〈出典：「演劇界」昭和26年10月〉

「双蝶々」は人形芝居大全盛、竹田出雲が油の乗ったさかりに作られた浄るりで、世話物の通し狂言というのも「夏祭」とならんで珍しいし、内容からいうと「夏祭」よりズッと整っています。親子の義理人情が中心になっているから、今の人にもわからない所はありません。この作が、人形では大して当らなかつたのに、歌舞伎へ入って急に評判がよくなったというのも、生きた人間の演じたほうが、面白く見られるような作意だからでありましょう。

事件の中心は、典型的な和事役といってもいい山崎屋与五郎で、これが藤屋の吾妻といい仲になっているのを、横あいから悪侍いが吾妻に惚れたため、濡髪長五郎と放駒長吉という、力士同士の達引になり、それがついに殺人事件にまで発展して、三方四方の肉親にとぼっちりがかかり、思わぬ悲劇をかもし出してゆく構想は、別に新しいとはいえませんが、今の世に決して無きにしもあらずの事件でもあり、それを九段つづきの長い狂言に仕立てたのは、原因が簡単だけに作者の腕の非凡なところがよくわかります。ことに六段目の「橋本」では父親同士の愛を描き、この八段目「引窓」に至って、母性愛を強調して対照させるなどは、ちょっと憎いような技巧です。「引窓」一幕の中心は全く母性愛であって、したがって母の役が主人公といえます。母の役が拙かったらこの一幕は駄目になってしまいます。山城少掾にしても、母を中心にして語るくらいです。

舞台は八幡在の南与兵衛の家。昔は郷代官で相当富裕だったが、今は落ちぶれている。といってもその日に困るような身代ではありません。妻のお早は新町で都といった太夫、与兵衛と思われたい夫婦です。母は後妻ですから与兵衛とは生きぬ仲だが、家庭争議などは一切なし、母子三人水入らず、まことに楽しい一家です。時は秋の待宵、母と嫁が月見の供え物の支度をしているという美しい風景です。所の習いで明月には放生会の祭、このあたりは賑かにもなろうという空気です。そうした最中、偶然にも悲劇が降って湧こうというのですから、幕があいた暫くのあいだは、その前の楽しい気分が舞台に満ちていなければなりません。その用意でしょう、俳優によっては「一合蒔いた麦種の」云々の田舎唄をつかって、幕あきに近所の子供たちを踊らせていることもあります。また幕あきの母とお早との対話も、できるだけ隔てのない、仲のいいところを見せなければなりません。そうしてその会話の中に、いま主人の与兵衛が、領主に呼ばれて出頭していることを聞かせなければならぬのだから、この会話はなかなか大切なのであります。

頬かむりをして、糸立に身を隠した、歌舞伎では一見、世を忍ぶ姿とわかる濡髪長五郎が訪ねてきます。長五郎はこの母が大阪へ残してきた実子なのです。今は主人筋の与五郎のために、平岡郷左衛門三原有右衛門という侍いを殺して、お尋ね者の身になって

います。そうしてお早とは、まだ新町にいた頃の顔見知りですから、互いに久濶を叙するわけですが、そのお早の夫の与兵衛とても、三段目では太鼓持の佐渡七を殺しています。しかし佐渡七は贖金使いの上前取りだったので、与兵衛は殺し徳になって助かっているのです。それを聞いた長五郎が「アア同じ人を殺しても、運のいいのと悪いのとは」とちょっと述懐するのは巧い書き方だと思います。全く長五郎の殺した侍も悪党なのであり、正当防衛だったのですが、そんな事にかかわらず長五郎の罪はのがれられないものになっているのであります。

母は何も知りませんから、久しぶりに実子に逢ってホクホク喜んでいます。明日をも知れない命を思って、長五郎は一目、母に逢いに来たのでありますが、その喜ぶ心を察すると、来なければよかったと思ったわけです。むろん人殺し一件を明す気にもなれません。母のいうがままに二階へ上がって、与兵衛の帰りを待つことになりますが、そのとき「何もお構いなくとも、缺け椀の一杯ぎり、つい食べて帰りましょう」などというので、さすがの母もちょっと不審をおこします。そこで長五郎は二階へ、母とお早が奥へ入り、舞台に人のいなくなるまでが端場で、文楽ですとその次から、タテ語りが見られることになります。歌舞伎でもそれまでは簾内で語ります。

○

「人の出世は時知れず」のチョボで、花道から与兵衛が、羽織袴大小の立派な形で平岡丹平、三原伝蔵の二人と一緒に出て来ます。そうして二人を、ちょっと待ってくれと行って、下手の蔭に入れ、さて意気揚々と「母者人、女房ども、今戻った」と内へ入ります。原作では二人を蔭で待たすなどということはないのですが、鴈治郎がやったとき、ここへ大分入れゼリフをして、芝居を面白くしたために丁場が長くなり、そのあいだ二人を表へ待たせておくわけにもゆかないので、こういう段取りにしたのを、その後の人たちもみな踏襲しているわけなのです。

母もお早も、与兵衛が今までとは打って変わった、立派な侍い姿になったのに、おどろき喜び、その仔細を尋ねるので、「まつこの如く、衣類大小下しおかれ、名前も南方十次兵衛と、親の名跡に改め、昔のとおり七ヶ村の支配まで、仰せつけられましてござりまする」と語りますが、その跡で、殿様に目見得をした時のことを、仕方話しにする所が入れ事で、「逆鱗」の松右衛門を真似たもの、鴈治郎はここでかなり烈しく当込みをやり、「思わず汗がたましてござりまする」と、扇でバタバタやる所など、客がワッと湧いたものでした。延若は稍それを内輪にしましたが、吉右衛門は又もう一ばい自分の工夫でやっています。ここでは、二人侍いの前では大小の手前、威儀をつくらいますが、母や妻の前ではすっかり昨日までの町人に砕けて話しをするのを自然に見せるのが、むしろ役としての住所でありましょう。なお鴈治郎が出てくるときに、下座で「はるかあなたの時鳥」と吾妻八景を唄っていたのは妙なものでした。東京では大抵「結び合せし思いのたけを」と織殿を使います。延若のとき、それに直してもらおうと思ったら、大阪のお囃子が知らなかったので、「淀川の」何とかいう唄で間に合せたことがあります。

この一段がすんで、母と妻を奥へやり、改めて下手の二人を呼び出して内へ招じ入れ、用向きをききますが、こうなるとすっかり侍い気取りでゆくところが、一つ間違うと変にキザになってしまいます。吉右衛門は至極地味にやって、当込みなどは見せません。二人は、丹平の弟郷左衛門、伝蔵の兄有右衛門が濡髪長五郎に殺されたことを語り、その長五郎がこの八幡へ立ち廻ったらしいから、夜に入ったら地理を心得た与兵衛に詮議してもらいたいと頼みます。与兵衛はこの狂言の序幕で長五郎に逢っていますから、すでに知っているのですが、まさか母の実子とは気が付きませんから、心よく承知します。長五郎という名を聞いて、上手から母、下手からお早が出かけて聞き、びっくりしますが、お早はその時、茶を持って出て来てそれを落すので、ちょっと舞台に波瀾の動きを見せます。チョボに合せて、茶碗を落すキッカケが、お早役者にとっては、なかなかむずかしいようであります。

二人が帰ったあと、与兵衛はちょっと一思案——今までは急に出世して只嬉しさでいっぱいだったが、降って湧いた詮議の役、しかし首尾よく捕えれば又恩賞、どうしたら捕えられようといった考えです。それはお早にきかれて「召捕つて手柄の程を見せれば、母人にもさぞお喜び」というのもわかります。それをお早が否定するので、与兵衛が怒る、母が出て来てとめる。今までの楽しさにちょっとヒビが入る。いきなり破裂させずに、ここで前ぶれをきかせてあるのは、なかなか老巧な書きぶりだと思わせます。それからいよいよ、この幕中で一番技巧をこらした所へ移るのですが、それは、二階の障子をあけて長五郎がのぞく、その姿が手水鉢の水へ写る、それを見つけて与兵衛がびっくりする、見せまいとしてお早がいきなり引窓の綱を引く——そうした三方四方の仕草が一度に重なって表現されるくだりであります。それぞれが勝手に動くのではなく、チャンと義太夫の絃に合せて、動いたあげくが総合された絵面になる、歌舞伎の美しさを強調する面白いところですが、むろん動きや形が巧く工夫されなければなりません。

引窓をしめて二階が見えなくなるというのなら、現在の歌舞伎の舞台装置でゆくと、かなり不合理になりますが、これは人形芝居でも同じことで、やむを得ないと許されています。ただ問題は、与兵衛が水鏡をのぞくキッカケなのです。それまで与兵衛は、二重の真中に座っているのですから、それを何とかして縁側まで引ッ張り出さなければなりません。鴈治郎の型もかなり窮したもので、風呂敷だか袱紗だかを出してたたみ、埃がついている思い入れで、縁側までハタきに行ってみつけるという段取りになっていました。吉右衛門はそんな小細工をせず、只なんとなしに立ち上がって見つけるという風だったと覚えています。

これから先、引窓の開閉が、この芝居の起伏のキッカケになるという大技巧を見せるわけですが、このとき閉めるのがその一で、お早が、何をすると咎められ「雨もぼろつく、もはや日の暮れ、灯をともしてあげましょう」とさそくに言訳すると、「面白い、日が暮れたれば与兵衛が役、忍びいるお尋ね者、いで召捕らん」と立ち上がるので、お

早はあわて「ソレ、まだ日が高い」とまた引窓をあけ、「心つかいぞ切なけれ」で引張りになるまではお早の住所です。延若の与兵衛は、ここで、刀の提緒で襷をし、十手を持って立ち上がりました。こうすると形はまことによろしいが、襷をするまでに時間がかかるので、チョボいっぱい巧く間がもてません。ここは襷をする程のこともないと思います。

長五郎を捕える与兵衛の心底を見ると、母は手箱を持ってきて中から金を出し、これでその人相書を売ってくれと頼みます。この間は母の見せ場であり、与兵衛は受け身ながら、さてはそうかと気附いて母の心根をあわれむ大切な性根場であり、自然、この芝居でも眼目の個所ということになります。「鳥の粟を拾うように、溜めおかれたその金、仏へあげる布施物を費しても、この絵姿がお買いなされたいか」「未来は奈落へ沈むとも、今の思いにや替えられぬわいのう」などは、読んでいてもホロリとさせます。そこで与兵衛は脇差を抜いて投げ出し「丸腰なれば、相変らず八幡の町人、あきんどのしろ物、お望みならば、上げましょうかい」と砕けるくだりは見せ場ですし、また次にお早が、大切な手柄を支えたのも母が気の毒さ「常々からも万事の品、包むと思うて下さすな」という詞、アプレゲールの女からはとても望み得ぬしおらしきで、ただただ昔をしのぶばかりであります。

そこで鐘が鳴る。いよいよ日が暮れます。「夜に入らば村々を、詮議する我が役目」と立ち上がった与兵衛は「河内へ越ゆる抜け道は、狐川を左にとり、右へ渡つて山越しに——イヤ、よもやそうはゆくまいわい」と暗に長五郎へ逃げ道を教えるところも見せ場の一つですが、あんまりしつっこくやるのも考えもので、鴈治郎などはブンときたほうでした。そこで外へ出たが、思い入れあって下手に隠れます。ここで偶然、鴈治郎のこしらえた離れ座敷という一件が役に立ち、下手へ入るのも不自然ではなくなります。

長五郎が二階から下りて表へ行こうとする。むろん与兵衛の情に感激し、縄にかかる心なのですが、我が子可愛さで夢中になってしまっている母は「おればかりか嫁の志し、与兵衛の情まで、無にしおるか、罰あたりめ」と怒ります。「抜け道まで教えてくれた大恩を、なんと報じようと思うぞ。死ぬるばかりが男ではないぞよ。おのれが牢へ入るのを、親がどうして見ていられう」と泣き伏します。母親としてのこの詞は全くの真情で、無理はありません。お早は又、嫁としての立場から、早く落さなければとオロオロします。それでも長五郎が、覚悟しているといつてきかないので母はいよいよ腹を立て、「よいワ、勝手にしおれ」といいさま、剃刀で死のうとします。それを押えて「アア申し、あやまりましたあやまりました」と泣くくだりは長五郎の見せ場であります。

それから、何よりも姿を変えなければいけない、角力の看板になっている前髪を剃り落すのが一番だということで、母が手ずから剃刀をといで、前髪を剃るのです。「かかる思いがあろうとは、神ならぬ身の白髪はこの身」というチョボの間に剃り落しますが、その旋律もちゃんと心得て、メリヤス風にできあがっております。歌舞伎で、髪を梳くとか、剃るとかいう時には、下座のメリヤスを使って一種の哀調を湛えるのが定式です

が、もうこの浄るりができた時代には、歌舞伎の演出もある程度まで完成していて、そのいい所は人形でも、遠慮なく取りこんでいましたから、この一段の作曲者も、ここは歌舞伎に習ったのだらうと思われます。

人相書にもチャンと書いてあるとおり、長五郎が何よりの目じるしは、高頬に大きな黒子のあることです。これを第一に剃り落さなければいけないのだが、「これこそは父御の譲り、形見と思えば、わしにはどうも剃りにくい」と母が途方にくれたような顔をするところは哀れであります。「嫁女、こなたをたのむ」といわれるが「わしじやとてむごたらしい。それがどう剃られるもの。おゆるしなされて下さりませ」「思えば思えば、親の形見まで、剃り落すようになつたのか。心がらとはいいながら」可哀の者やととりついて、わつとばかりに泣きしずむ——このあたり、母親役者が腕を見せる最高の個所です。

「濡髪、とつた」

外に窺っていた与兵衛が、いきなり長五郎の顔へ、金包みを投げつけて、再び姿を隠します。その包みは巧みに長五郎の頬の黒子を削ったのでした。包みには路銀と書いてありました。——金包みを投げつけて黒子を削るなどは余ッぽどの手練です。どんなに業ができるか知らないが、こんな田舎の侍にしてはおかしいし、余り不自然だ、と思ったのでしょう、後年の鴈治郎は、金包みを投げつけても、黒子を削るという一件だけは抜いてしまいました。だんだんリアルに徹してくると、そこまで考えるのも、物が世話狂言だけに無理はないと思えますが、そうすると又、外にも不合理な点は沢山あるし、しまいには義太夫などに乗って芝居をやるのが馬鹿馬鹿しくなります。まずこの程度の不自然は認めるより外はありますまい。吉右衛門はむろん原作どおりやります。

黒子は消える、路銀はもらえる、母は喜んで、早く立たせようとする。看客も、そのまま長五郎が逃げのびると思っています。ところが意外にも長五郎は、「サア母者人、お前の手で縄かけて、与兵衛どのへ、お渡しなされて下さりませ」と手を後へ廻すのです。母親はおどろいて詞も出ず、お早が、なぜ与兵衛の心を無にするときく。それに答えるセリフが、長五郎の一番の見せ場であり、そのいい廻し一つで、看客を納得させなければならない、むずかしいくだりであります。長五郎は、金包みで黒子を消された瞬間に、かたく決心をしたのです。

「義理も法もわきまえなく、助けたい助けたいと母者人のお慈悲心、しばらくはお心休めと、元服までいたしました」、二人まで人殺しをした科人が助かるわけではない、なまじな者に捕えられるなら、与兵衛の縄にかかりたい——と、そこまではマア普通の気持ちなのですが、「コレそうのうては、未来の十次兵衛どのに、すむまいがな」といわれて、母はギックリ胸にこたえ、盲目になっていた今までの溺愛から目が覚めるのであります。母親役者が、ここでウンと腕を見せてくれないと、折角の作意が十分に現れませぬ。実子に逢つての意外さ、与兵衛の出世を聞いての喜び、長五郎の罪を聞いての驚き、与兵衛の心情を聞いた嬉しさ、長五郎が落ちると聞いての安心——僅かな間に運命

に苛なまれてきた母が、ここで最後の決心をする、脚本としても土壇場です。ここが詰まらなかつたら、この一幕は滅茶になるので——今まで実子のことばかり考えて、継子のことを忘れていた。たとえ実子は犠牲にしても、継子の幸福を考えなければ、草葉の蔭にいるその実父へ義理が立つまい——母はそうした痛いところを突かれたわけであり、こうした「義理」は、或いは今の若い人には、封建制としか受取れないかも知れませんが、家族制度堅固な昔にとっては、むしろ大切な道德だったのであります。それを真先にいわなければならない母親が、忘れていたのですから、「アア誤まつた長五郎、よういうてくれた」と崩折れるのもやむを得ません。「それでは連合いの心を、無になさるといふもの」と、嫁は嫁の義理で止めますが、母は押しのけ、引窓の綱をとって、長五郎を縛るので、引窓は再びしまります。月のさし込んでいたのがそのため暗くなったように、母親の心も「暗き思いの声はり上げ」で、その綱をとって涙ながらに、「濡髪長五郎を召捕つた。十次兵衛はいやらぬか。受取つて手柄に召され」と叫びます。義太夫劇でしぼらせる涙には、かなり空々しいものが沢山にあるのですが、この場合の母の涙など、観客も十分に同情ができればよい。

窺っていた与兵衛は内へ入り、「お手柄お手柄。そうのうては叶わぬところ。とてものがれぬ科人。受取つて御前へ引く」といいます。そういうのだから、与兵衛はそのまま引立てるのかと観客も思いますが、さらに続けて「女房ども、もう何時」

「されば、夜半にもなりましょう」

「たわけ者め。七ッ半を最前きいた。時刻がのびると役目があがる。縄さき知れぬ窓の引き縄、三尺のこして切るが古例」

与兵衛は刀を抜いて、長五郎の縄を切ります。綱が切れると、引窓はまたガラガラあいて、さし込む月の光。

「南無三宝、夜があけた。身共が役目は夜のうちばかり、明くれば即ち放生会、生けるを放つ所の法、恩に着ずとも、勝手にお行きやれ」

と長五郎をそのまま門口へ突き出します。与兵衛のいうことは、なんだかこじつけ沢山ですが、それはどうしてもよろしいので、継母が自<sup>(ママ)</sup>引に義理を立てて実子を縛る苦痛を見ながら、それをノメノメ受取るのでは、今度は継子としての義理が立たない。自分としては義理ある弟を助ける。そうした義理が、この一幕の解決で、もうこうなつては長五郎もあらがいようがなく、深く恩を謝して逃げてゆく。母は只モウ手を合せるばかり、というのが幕切れで時代物のような絵面の美しさは見られない代り、美しい人情に包まれて、後味よく幕がしまつてゆきます。但し、長五郎が助かるのもこの幕だけで、最終の幻竹右衛門内では、やはり長五郎は与兵衛の縄にかかりますが、罪が軽いことは文章に暗示されています。

こうしてこの一幕は、母親の情愛と、しがらむ義理とででき上がっておりますが、まだその外に、与兵衛とお早の夫婦愛が、かなりよく書けていることに注意しなければなりません。この一幕でこの夫婦は、殆んど口もきき合わないくらいですが、それでいて

互いに愛し合っていることがよくわかります。そんな点も義太夫劇としては珍しいほどだと思います。